

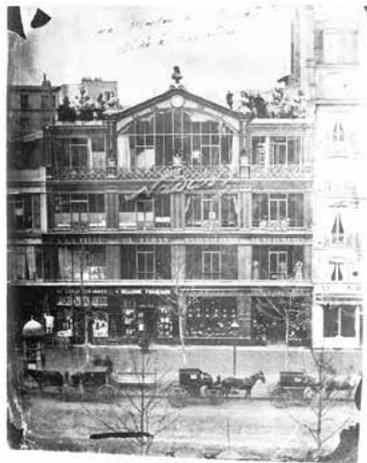
なでお金を出し合って会社組織をつくったわけ。で、次の年、日本でいえば表参道みたいな当時の最先端のファッションストリート、キャピュシーヌ大通りで、はじめての展覧会を開いたんです。

アシ 最初の展覧会が表参道って、すごいですよね！

五郎 ナダール^{※2}という超有名なカメラマンがいて、彼のでっかい写真スタジオが通り沿いにあったので、それを借りたわけ。この本でも、彼が撮影した何人かの肖像写真を取り上げてます。で、こちらがその写真スタジオ。ここで、1874年4月15日から5月15日まで、のちに第1回印象派展と呼ばれることになる記念すべき展覧会が開かれた。モネの『印象、日の出』はそこに出品されたわけだけど、この印象的なタイトルは、実は、最初から決まっていたものではなかったらしい。



ナダールのセルフ・ポートレート(1854-55年頃、本人撮影)



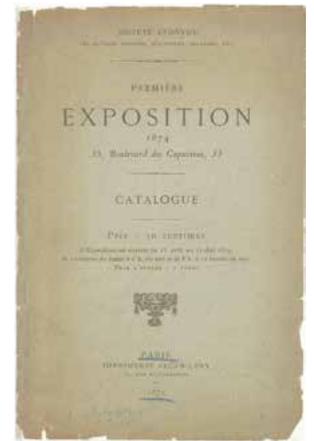
ナダールの写真スタジオ(1860年、本人撮影)

アシ そうなんですか？

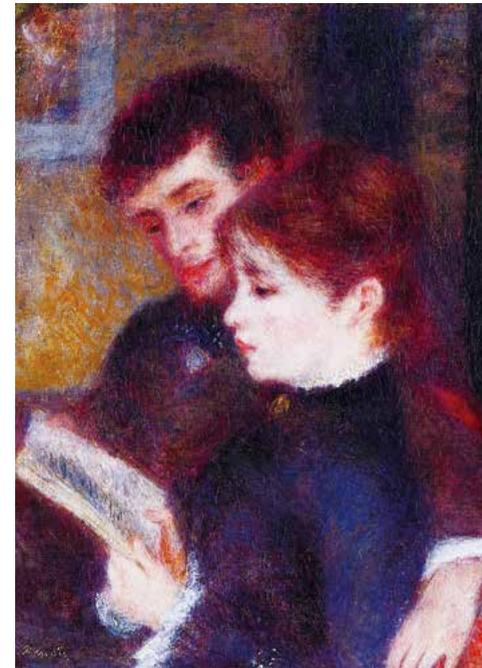
五郎 元々は『ル・アーヴルの眺め』だったけど、展覧会のカタログ制作係だったルノワールの弟エドモン^{※3}に「もっといいタイトルはないか」といわれ、モネが「じゃあ、『印象』で」と伝え

.....
※2 ナダール(1820-1910年)：フランスの写真家、風刺画家。語尾に何でも「ダール」をつけたがる口くせから、本名トゥールナションをもじってトゥールナダールと呼ばれ、やがてナダールを自称するようになる。肖像写真家として人気を誇っただけでなく、気球に乗って世界初の空中写真も撮影した。
※3 エドモン=ヴィクトール・ルノワール(1849-1944年)：画家ピエール=オーギュスト・ルノワールの弟で、ジャーナリスト。兄の支援者であるシャルパンティエ夫妻(198ページ『シャルパンティエ夫人と子どもたち』参照)が発行する文芸批評誌で美術ページを担当、ギャラリーや展覧会の運営にも携わる。『読書するふたり』に描かれたのはエドモンとルノワールお気に入りのモデル。

たところ、エドモンがそこに「日の出」とつけ足したと、フランス語版 Wikipedia には書いてある。いずれにせよ、深い意図があってつけたタイトルではなかったようです。



第1回展カタログの表紙



ルノワール『読書するふたり』(1877年、油彩、32.8×24.8cm、群馬県立近代美術館) *左の男性が弟のエドモン

“ ”
実はディスられていなかった!?
ルイ・ルロワによる記事を読み解く
”

五郎 その『印象、日の出』を見たルイ・ルロワ^{※4}という画家で評論家が、「ル・シャリヴァリ」という新聞で「描きかけの壁紙のほうがマシ」

.....
※4 ルイ・ルロワ(1812-1885年)：フランスの画家、版画家。サロンに何度も入選するほどの腕前だったが、第1回印象派展の印象を記した「印象派の展覧会」という記事によって現在に名を残す。